

纜

木本 隆行

北窓開く一羽の鳥を放つごと
囀や空ひき合うてゐるごとし
太白のふくらむ宵のさくらかな
手の裏にのこる湿りや紙風船
目借時名刺の裏の白さかな
桜葉降る斎場といふ出会ひの場
噴水の日を抱き余し高くあり
遠浅のひかりを招くサングラス
裏木戸を付けて箱庭ととのへり
刃物屋のやいばの揃ふ大暑かな
纜を解き夏雲を帆としたり
開けつ広げの家しづかなり仏桑花
吾が顔が貌となりたる茂りかな
山国の水に芯あり洗鯉
ひんやりと土間のにほへる夕立かな
吾が影の波に洗はれ盆の風
下書きのいらぬ文書く金木犀
菊人形余情あまりて匂ひけり
朝寒の声まつすぐに立ちにけり
稜線に力を残し山眠る
マスクして渋谷のこゑに溺れをり
難題と嚏もちくるをとこかな
流木の風葬めきて冬ざるる
鉄瓶の湯を練るおとや漱石忌
大寒の影をはなさぬ櫟かな
蘆枯れて水は光陰うばひけり
大霜や未踏の土地となりゐたり
冬木の芽空に梯子をかけるごと
心音にしたがつてゐる探梅行
寒晴や水平線を引く力